
インフィニット・ストラトス ~ 蒼き空を血に染めて ~

クリス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス〜蒼き空を血に染めて〜

【Nコード】

N1266Z

【作者名】

クリス

【あらすじ】

国際連合対テロ機関？センチネル？そこに所属する唯一にして最高戦力の？織班一夏？彼がIS学園に入学するところから物語は始まる。

ープロローグー(前書き)

プロローグから

ープロローグー

なあ・・・空って何色に見えるだろうな？

・・・俺には赤に見える・・・

赤い赤い血の様な赤だ・・・

何故かって？

あんだけ殺したんだ・・・

赤にも見えるさ・・・

数年前までは違ったのになあ・・・

俺は壊すだけ、殺すだけ

今も未来もかわらねえ・・・

なあ・・・そうだろ？

銃を握り弾薬を装填して安全装置を解除し照準を敵に合わせ引鉄を絞る。

何処に行こうがかわらねえ

学園に行こうが街に行こうが戦場に行こうが何一つかわらねえ。まるで同じクソツタレだ

俺の人生はこんな筈じゃあなかった筈だ。

愚痴を言ったところで何もかわらねえ

俺は兵士だ。

なんの感情も持たずなんの悲しみも感じない機械だ。

織班一夏は死んだんだ。

今の俺はただの？殺し屋？

なあそうだろう？

ープロローグー(後書き)

お、思ったより難しい・・・

Ⅰ主人公設定 ⅠS設定Ⅰ（前書き）

Ⅰ夏が殆どオリキャラなのでⅠ応設定を付けます

Ⅰ主人公設定 ⅠS設定Ⅰ

原作からの変更点

性格がかなり歪んでいる。

年齢が18歳

よく葉巻を吸う

白式に乗っていない

ⅠS設定

名前 ウォー・ドッグ：ヘビーアームズ

世代 第二世代

説明

国連対テロ機関？センチネル？が開発した異形のⅠS、全身装甲の一機で主力戦闘機二個大隊分に指摘する戦闘能力を持つ。装甲はナノマシンの結晶で、できた特殊合金製の強固な装甲、これによりエネルギーをシールドに消費されことなく戦闘を続行できる。

武装

対ⅠS戦闘用20mmアサルトライフル：WDIMA01

全長2.5m

重量107kg

装弾数100（ドラムマガジン）

射程 4 0 0 0 m

対 I S 戦闘用 2 5 m m スナイパーライフル : W D I M A 0 2

全長 2 . 8 m

重量 9 7 k g

装弾数 1 5 (箱型弾倉)

射程 6 0 0 0 m

対 I S 戦闘用 1 5 m m 自動拳銃 : W D I S A 0 1

全長 5 7 c m

重量 3 7 k g

装弾数 1 5

射程 7 0 0 m

対長距離戦闘用 8 0 m m 滑腔砲 : W D I H A 0 1

全長 4 . 5 m

重量 4 5 0 k g

装弾数 5 (箱型弾倉)

射程 7 0 0 0 m

対 I S 戦闘用 6 連装ミサイルポッド : W D I H A 0 2

全長 1 . 8 m

重量 5 5 0 k g

装弾数 6

射程 2 4 k m

対近接格闘用ブレード内蔵型実体装甲

実体装甲

厚さ 2 5 m m

材質 ナノマシン合金

ブレード

刃渡り105cm

ウォードッグ基本スペック

全長2.8m

重量1.6t

最高速度2600km/h

シールドエネルギー1500

搭載武装5個

Ⅰ主人公設定 ⅡS設定Ⅰ（後書き）

何かチートかも・・・

武装は話が進むにつれて増えていきます。あと感想をくれた読者様
ありがとうございました！

1011 (前書き)

やっと完成した。

どうしてこうなった・・・

俺、織班一夏は困惑していた。何故ならほぼクラスメイト全員が俺を凝視しているからだ。

あー面倒なことになった。何で俺がこんな平和ボケした学園に入学しなきゃいけないんだ？本当勘弁してくれよ！クソツタレが！！つか

皆俺を見過ぎだぞ！

そんなことを考えていると教室のドアが開き担任と思われる人間が入ってきた、だがその人間は教師と呼ぶにはあまりにも頼りない。

「皆さん入学おめでとう！私は副担任の山田真耶です。」

無言・・・

「えっ・・・ああ・・・」

無視されたのが辛いのか副担任はかなり動揺している。

おいおい副担任がこんなんで大丈夫なのかよ？つたからこんな所には行きたくなかったんだ。前で副担任が何か言っているが俺は無視して思考に沈む。

何故今更俺をIS学園に入学させたんだ、あれか？俺が男で唯一ISを使える奴だって世間にバレたからか？それとも亡国企業にたいする牽制か？確かに最近奴らの動きが活発になっている。一ヶ月前

だってフランスのラファール・リバイヴが二機強奪された。確かにセンチネルの最高戦力である俺をIS学園に入学させりゃ奴らは動きずらくなる。だが、別に入學させなくても牽制は出来る。それとも・・・姉貴の意向か？・・・考えても埒があかねえ

「・・・班君！・・・織班君！」

思考に沈んでいると前で副担任が俺のことを必死に呼んでいた。

「何ですか？」

俺が顔を上げると副担任が俺に顔を近づけていた。

「えっ・・・と・・・あ、から始まって今お、なんだよねえ・・・だから自己紹介してくれるかなあ？ダメかな？」

何だ、そんなことか。別にそんなビクビクしなくてもいいじゃねえか

「わかりました。」

俺はひと呼吸おいて立ち上がった。

「名前は織班 一夏 年齢は18だ。好きな物は葉巻とウイスキー
嫌いな物は中途半端な兵器と下らない人間だ」

「 「えっ・・・？！」「」

クソッ！！ミスったか。俺が内心慌てしていると不意に出席簿が飛んで来たのでギリギリで避けた。

「アブねえ!!」

顔を上げると目の前には俺の姉、織班千冬が立っていた。

「お前はロクに自己紹介も出来んのか？」

「仕方ないだろ。姉貴」

また出席簿が飛んで来たので肘でガードした。

「ふん、いい反応だな。しかし学校では織班先生とよべ」

「わかった」

「織班君って千冬先生の身内？」

「いいなあ代わってほしいなあ」

「男でISが使えるのもそのせいなのかな？」

と、クラスメイト共が口々に騒ぐ。いつもそうだISが登場してから皆俺のことを織班千冬の弟としか見なくなつた。もしISが誕生しなければ俺はもつと幸せだったかもしれない・・・俺の人生は違つたかもしれない・・・
運命を呪つても仕方ないか。

「先生会議はもう終わったのですか？」

「ああ、すまなかつたな山田君クラスの自己紹介を押し付けてしまつて」

と、言つと姉貴は手を腰に当てながら

「諸君、私が担任の織班千冬だ！一年でお前らを使い物にするのが私の仕事だ」

キヤーーーー！！！！！！

「千冬様よ！！本物の千冬様よ！！！！！！」

「私あなたに会いたくてここに来たんです！北九州から！！」

おい！お前らいきなり叫びだすなよ！！耳が潰れるじゃねえか！！
心の中で愚痴を言いながらおれは思った。

つくづく平和ボケしてやがるな。そんな下らない理由でここに来たのかよ。お前らは自分がどれだけ人を蹴落としてきたかわかつてんのかよ？お前らの下にどれだけ入学したかった奴らがいると思ってるんだよ？

そんなことを考えていると姉貴が？ヤレヤレ？といった感じで

「まったく、よくも毎年これだけ馬鹿が集まるものだな。それとも私のクラスにだけ集中させているのか？」

キヤーーーー！！！！！！

と、またクラスメイト共が騒ぎ出す。クソツタレが！それでも兵器の扱い方を教える学校なのかよ？

「諸君らには半年でISの基礎知識を覚えてもらう。その後実習だが基本動作は半月で身体に染み込ませろ！いいか？いいなら返事をしろ。良くなくても返事をしろ。私の言うことには返事をしろ」

「「はい！」」

なんとも傲慢だなあ。俺の姉貴は第一回モンド・グロツソ優勝者だ。ご自慢のISを使って見事優勝した。しかし第二回目の大会で・・・

- ・ 思い出すのはやめよう。いい思い出じゃないからな・・・

副担当がISについて説明を始めた。ヤレヤレ面倒なことになったもんだ。これならまだ敵に向かって銃を撃つほうが全然まだ。

・・・何も変わらねえまるで同じクソツタレだ・・・

1011 (後書き)

とても難しいです。あと読んだら是非感想を下さい。お願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1266z/>

インフィニット・ストラトス～蒼き空を血に染めて～

2011年12月7日00時55分発行